

# 央掘魔羅經に見る仏典解釈法の適用

鈴木 隆 泰

## 1. 問題の所在と本稿の目的

本稿は『央掘魔羅經』という如来蔵系經典に対する個別研究である。しかし思想が本来「運動」である以上、『央掘魔羅經』がいかなる思想的脈絡の上にあるのかを踏まえておくことが、今後の議論・考察に資するものと思われる。よって、予め従来の如来蔵思想研究を筆者なりにまとめて概観しておくことにしたい。

『如来蔵經』において初めて正式に表明された如来蔵思想は、語義解釈を含めた如来蔵 *tathāgatagarbha* の概念の拡大を伴いながら発展していき、その後『宝性論』に至り、一旦その理論に関する集約のピークを迎えることになる。『宝性論』の成立に力あった經典の代表は、高崎 [1974] が指摘するように、『不増不減經』と『勝鬘經』である。その結果として、『宝性論』において理論化されている如来蔵は、輪廻・涅槃の両者を成立させる拠りどころとしての性格を持つものとなっている。

一方、『宝性論』に向かって理論化されていく過程以外にも、如来蔵思想は当然発展を遂げている。その一つは『涅槃經』『央掘魔羅經』『大法鼓經』をはじめとする一連の經典群における発展である。これらの經典を涅槃經系經典群と呼称するとき、その最大の特徴は、如来蔵を仏性 *buddhadhātu* という語によって説明・解釈し直している点となるだろう。

実は『宝性論』自体は『涅槃經』を参照、引用しているだけでなく、積極的に仏性の語を取り入れている。しかし、涅槃經系經典群における如来蔵・仏性には、輪廻・涅槃の両者を成立させる拠りどころとしての性格がなかったため、自らの理論の骨格をなす重要部分においては、ほとんど顧ていないのである。そのため『宝性論』を中心に置くとき、『不増不減經』や『勝鬘經』が正系であるのに対して、涅槃經系經典群は傍系であり、特に、『宝性論』に引用されていない『央掘魔羅經』や『大法鼓經』は、如来蔵思想の発展に寄与している点が少ないという評価が生じることとなる。しかしながらその評価の正当性は、『宝性論』を中心に

置く」ときに限り成立するものであることは言うまでもない。そうであるにも関わらず、なぜかその評価が一般的と見なされる状態が続いていた。

そのような状況下において下田 [1997] は、如来蔵という衣装だけに終わらない『涅槃經』のインドにおける全体像を、初めてわれわれの前に包括的に示してくれた。その成果を一言で述べるならば、『涅槃經』には運動が存在する」ということになるだろう。その「運動」を思想的側面で捉えるとき、『涅槃經』の思想には、如来常住（如来と衆生とは隔絶）から如来蔵・仏性（如来と衆生との本質的無差別）へと重点を移動させる運動が存在する」ということになる。如来蔵・仏性に関しても、『涅槃經』においては輪廻・涅槃を成立させる拠りどころではなく、仏塔信仰の脈絡からも考察していった結果、個々人に内化された仏塔、すなわち仏陀の遺骨 *buddhadhātu* としての側面を併せ持っていることが示された。

下田 [1997] の発表と前後して涅槃經系經典群の調査を行っていた本稿筆者は、『涅槃經』内部において見られた如来常住と如来蔵・仏性に関する運動が、涅槃經系經典群という、より大きなコンテキストにおいても表れていることを見出し、その成果の一部を鈴木 [1997] としてすでに発表している。すなわち、「仏性という用語を使用する」ということを第一の理由として括られた經典群が、如来常住と如来蔵・仏性との間の思想の動きという観点から見ると、より積極的な意味合いをもって經典群を形成していることが判明したのである。本稿では、上記の涅槃經系經典群というコンテキストにおける『央掘魔羅經』の意義と役割を、その背景を踏まえながら紙面の許す限りで少しく考察していくこととする。

## 2. 涅槃經系經典群における如来常住と如来蔵・仏性の運動

上に見たように、涅槃經系經典群を「仏性の語を使用する經典群」ではなく、『涅槃經』、並びにその近くにあって、如来常住と如来蔵・仏性の間の運動を担うもの」と定義し直すとき、この經典群に属する主要なものとして、『大雲經』『涅槃經』『央掘魔羅經』『大法鼓經』の四つの經典を挙げることができる。

『大雲經』の最初の成立時期は、おそらく現行『涅槃經』より遡らせることができるだろう。しかし現行『大雲經』の成立と、『涅槃經』の前半第一類から第二類の冒頭部（「四法品第八」に相当）に至るまでの発展との間には、如来常住や世間随順に関して少なからず交渉があり、その後両者は袂を分かったものと考えられる。仏陀の遺骨 *dhātu* の存在を完全に否定する『大雲經』は、初期大乘仏教興起以来の目標の一つであった「仏塔信仰からの脱却」を目指して、如来常住を強調する

方向性を堅持した。それに対して『涅槃經』は『大雲經』との離反後、後半の第二類で仏陀の遺骨（仏陀）を衆生の内なる仏性として内化することによって仏塔信仰を包摂・昇華した。そのため、衆生と如来との距離が接近しすぎるという結果を招くこととなった。『涅槃經』はこの問題に対処するため、持戒を強調したり一闍提を再解釈するなどして対策を図ったが、如来と衆生の過度な接近は、『涅槃經』内部ではもはや抗しきれないものとなっていた。

『涅槃經』の強い影響下に成立した二つの經典が、相互に密接な関係を持つ『央掘魔羅經』と『大法鼓經』である。『大法鼓經』は、『涅槃經』で生じた如来蔵・仏性に基づく如来と衆生の過度な接近を受けて、教説の中心を再び如来常住へと回帰させようとする。その際に『大法鼓經』に『涅槃經』と並んで強い影響を与えた經典が、如来常住を説き続ける『大雲經』と一乘を説く『法華經』であった。しかし『涅槃經』第二類の如来蔵・仏性をも土台とする『大法鼓經』の如来常住は、如来蔵・仏性を前提としない『大雲經』や『涅槃經』第一類の如来常住とは同じものではなく、如来の常住性に基づいて一切衆生の成仏が保証されるという、如来常住であっても如来と衆生とが隔絶しない独得な構造を有するものとなっている。このことにより、涅槃經系經典群における如来常住と如来蔵・仏性の動きが、単純な往復運動ではなく螺旋状に発展したものであることが見て取れる。

### 3. 『央掘魔羅經』における教えの説き方を巡る解釈法の適用

『大法鼓經』の姉妹經典とも呼ぶべき『央掘魔羅經』は、『大法鼓經』に見られた如来常住への回帰運動を起こすことはなく、『涅槃經』第二類の直接的な後継者としての位置を保持しており、『涅槃經』における如来常住から如来蔵・仏性への運動の直線的延長上に位置していると言うことができる。そのため『央掘魔羅經』の如来蔵・仏性は、『涅槃經』のそれと大差がないと言っても過言ではなく、その限りにおいて、『央掘魔羅經』が如来蔵・仏性思想の発展に寄与するところが少ないとする評価は首肯できる。それでは、『央掘魔羅經』の思想は如来蔵・仏性を含めた仏教思想の発展上、ほとんど意味がないものであるかと言えば、決してそうではない。かえって、『央掘魔羅經』は仏教思想の発展に決して欠くことのできないある要素を、經全体に渡って主張しているのである。その要素とは、教えの説き方を巡る解釈法である。以下、この点を検証していくこととする。

一般に八万四千の法門と言われるように、仏教には様々な教説があり、中には相互に矛盾していると思われるものも少なくない。しかしそれらが皆「仏説、

仏語 buddhavacana] とされている以上、重要になってくるのは、Ruegg [1989, 1990] などが指摘するように、「了義・未了義 *nītārtha/neyārtha*」「意図性 *ābhiprāyika*」を考慮した解釈法になる。中期大乘仏教に限れば、初期大乘仏教において空性説が説かれたのを受けて、その意図性に着目しながら「密意を解く」というかたちで、あるものは唯識説を、あるものは如来蔵・仏性説を展開していくことになる。後者の如来蔵・仏性思想について言えば、先駆者の『如来蔵経』において、如来蔵の教えが縁起・空性の理法と同等の位置にあるものと表明されており、『涅槃経』に至るとより明確に、煩惱の空と常住な如来・解脱の不空とが宣言され、空性説の再定義を行っていることが知られる。

このように、「空性説の密意を解く」というかたちで宣言された如来蔵・仏性説を受けた『央掘魔羅経』は、次の段階として、空性説に限らず仏教の様々な教説の密意を如来蔵・仏性をもって解くことを自らの主任務と課していると考えられる。このことは、従来の空性に代わって、如来蔵・仏性が諸説の密意を解くあらたな鍵・道具として機能していることを意味する。たしかに、如来常住説をもって密意を解く作業も行っているが、如来蔵・仏性を扱う比重の方がはるかに高いことが、先に、涅槃経系経典群における『央掘魔羅経』の位置を、『涅槃経』第二類の直接的な後継者として定めた理由の一つとなっている。もちろん、「了義・未了義 *nītārtha/neyārtha*」「意図性 *ābhiprāyika*」を考慮していく解釈法は、如来蔵・仏性説に限られるものではなく仏教全体を貫くものである。しかし、中期大乘仏教の思想である如来蔵・仏性説にこの仏典解釈法の特徴が強く表れていることもまた事実である。このような背景を有する『央掘魔羅経』が、教えの説き方を巡る解釈法を強調し、様々な教説の密意を解く作業を経全体に渡って行っていることは、仏教思想の発展過程における如来蔵・仏性説出現の意味・意義を、端的に物語っているとと言えるだろう。以下、『央掘魔羅経』における解釈法の強調と、密意を解く作業の例をそれぞれ一つだけ挙げてみよう。

アングリマーラは説法第一と言われるプールナに、かつて世尊が説いた教説の真義を尋ね、プールナが無我説をもって教説の真義とすると答えると、アングリマーラは、その教説の真義は如来蔵であるとしてプールナを叱責する箇所がある。ここで力点となっているのは、プールナが如来蔵を知らなかったということだけでなく、彼が世尊の教説に如来蔵が密意されていたことを知らなかったということ、すなわち、世尊の教説の意図性を知らずに法を説いたことであり、そのことに対してアングリマーラはプールナを叱責しているのである。また、『央掘魔羅

経』は肉食を禁ずることに関して、一切衆生は同一の仏性を持っているために断肉すべきであると主張する。これは如来蔵・仏性説によって爾前の教説の密意を解いている好例である。

上記のような『央掘魔羅經』の性格・主題は、アングリマーラという人物を主人公として選んだこと自体にすでに表れている。有名な盗賊、あるいは殺人鬼であるアングリマーラに関する伝説は、仏教徒の間で様々に語り継がれ脚色され、その足跡の一部を数種類のテキストとして残してきた。その中で今回取り上げた『央掘魔羅經』は、他のアングリマーラを扱うテキストとは全く違う性格を有している。本經に登場する菩薩大士としてのアングリマーラは実は南方世界の如来であり、様々な幻を現じて衆生を教化してきた。彼の殺生行為のみならず、彼を殺人鬼となした婆羅門の師匠やその妻でさえ、全て如来の現じた幻であると説明する。言うなれば、如来の慈悲や菩薩行によって、アングリマーラ伝説の密意を解いているのである。しかし、アングリマーラ伝説の密意を解くことに『央掘魔羅經』の目的があったのではない。むしろ、自らの主題が仏教の解釈法を強調し様々な教説の密意を解くことにあったため、あえてアングリマーラ伝説をモチーフに採用してその密意を解いてみせたと考える方が適当であろう。

このように、『央掘魔羅經』は教への説き方を巡る解釈法を強調し様々な教説の密意を解く作業を経全体に渡って行うことによって、仏教思想の発展過程における如来蔵・仏性説の意味・意義を明確に主張する經典であり、そこに、涅槃經系經典群においてだけでなく、ひいては仏教思想史上における『央掘魔羅經』の存在意義の一つがあると考えられる。

(参考文献)

- 下田正弘 [1997] 『涅槃經の研究』, 東京: 春秋社.  
 鈴木隆泰 [1997] 如来常住經としての『大法鼓經』, 『仏教文化研究論集』1, 39-55.  
 高崎直道 [1974] 『如来蔵思想の形成』, 東京: 春秋社.  
 Ruegg, D. S. [1989] *Buddha-nature, Mind and the Problem of Gradualism in a Comparative Perspective*, University of London.  
 [1990] *Allusiveness and Obliqueness in Buddhist Texts*, *Publications de l'Institut de Civilisation Indienne* 55, Paris.

(キーワード) 大雲經, 涅槃經系經典群, 央掘魔羅經, 大法鼓經, 如来蔵・仏性  
 (東京大学助手)